

要旨 「韓国研究の形成と冷戦－韓国外交文書の分析を中心に」

小林 聡明（日本大学）

これまで幾多の戦争を通じて、さまざまな新たな学問が出現し、そして体系化され、制度化が試みられていった。第二次世界大戦期に急速に蓄積を増した「地域研究」も、その一つであった。とりわけ北米における日本研究は、その顕著な事例となっている。

日本研究が、第二次世界大戦を通じて学問的展開をみせていたことを考えるならば、朝鮮半島地域をめぐる学知は、どの戦争を契機に、いかに蓄積され、「韓国研究」（Korean Studies）として姿をあらわしていったのだろうか。本報告は、冷戦期における韓国研究が、学問分野として形成されていくプロセスについて、韓国外交文書を用いて、冷戦と広報文化外交という文脈から論じようとするものである。

本報告は、次の3つの課題から構成される。第一に、1960年代から80年代にかけて韓国外交部が、大学や研究者に対して、どのように学術研究支援を行ってきたのかに着目して、欧米のアカデミアにおいて、韓国研究の制度化が進められていく過程を描き出すことである。第二に、外交部による韓国研究支援が、1960年代以降に本格化した韓国の広報文化外交のなかで、どのように位置づけられ、いかなる意味が与えられていたのか、その政治性について、「対外弘報活動」と「海外での文化院設置」の動きとの関係性に注目して解明することである。第三に、冷戦期に形成され、制度化が試みられていく欧米での韓国研究の特徴的な姿を浮き彫りにし、そこに内在化された冷戦の論理や意味を読み解いていくことである。

以上の課題の解明を通じて、本報告は、冷戦の学知として形成され、展開していく韓国研究の歴史的道程の一側面を照らし出すことで、冷戦期における学知の伝播にたまたみ込まれた政治性について、広報文化外交という切り口から読み解いていこうとするものである。ここに本報告のもっとも大きなねらいがある。